

教職支援室便り（12月号）

令和7年 12月12日 (金)

文責：教職支援室 曽我文敏

☎ 0985-20-4808

「教職特別講座の思い出」卒業生からの寄稿

10月号から、「教職特別講座の思い出」をテーマに、卒業生からの寄稿文を掲載しています。卒業生の皆さんのが今、どのように「教職特別講座」を受け止めているのかなど、率直な気持ちや考えを知ることができればと思っています。

今回は、福岡県福岡市立堅粕小学校の喜山桃名さんと、鹿児島県三島村立三島片泊学園の門前愛貴さんの寄稿文です。お忙しい中、本当にありがとうございました。

令和3年3月卒業
福岡県福岡市立堅粕小学校 喜山桃名さん

このたびは、寄稿の機会をいただき誠にありがとうございます。日々の授業や教員採用試験対策を通して、多くの学びと気づきを与えてくださった曾我先生への感謝の思いを込めて、筆を執らせていただきます。

福岡市で小学校教師となり、早くも5年目となりました。教職を志す中で、「教職特別講座」は、私にとって大きな支えとなりました。将来に対する不安や、教員採用試験への漠然とした焦りを抱えていた私にとって、講座は“現場を目指す覚悟”を育ててくれる時間だったと感じています。

講座では、教育法規や教職教養、模擬授業などの試験対策だけでなく、教育に関わる様々な価値観や実践の声に触れることができました。特に印象に残っているのは、面接演習の場面です。緊張で言葉が詰まってしまった私に、先生は「うまく話そうとしなくていい。あなたの中にある思いを信じなさい。」と温かく声をかけてくださいました。その一言が、自分自身の言葉で語る大切さに気づかせてくれました。

また、進路や試験に悩むたびに、先生は親身に相談に乗ってくださり、いつも真摯に向き合ってくださいました。自分の弱さや迷いを受けとめてもらえたことは、教職を目指す上での大きな力となりました。

今、私は教育現場で子どもたちと向き合う日々を送っています。迷ったとき、初心に立ち返ってくれるのは、あの講座で学んだ時間です。誰かの思いに寄り添い、言葉を大切にしながら関わる姿勢は、先生の姿から学んだことでもあります。

教職特別講座は、単なる受験対策の枠を超えて、教育の本質や自分自身と向き合う機会を与えてくれました。この講座に出会えたこと、そしてあたたかく導いてくださった先生に、心から感謝しています。

平成31年3月卒業
鹿児島県三島村立三島片泊学園 門前愛貴さん

勉強会（特別講座）で私が一番印象に残っていることは、個人面接と集団討論です。個人面接では、勉強会（特別講座）以外の時間帯にも、個人的に曾我先生に何度も何度も指導して頂きました。演習を重ねるごとに、自分の考えや思いを堂々と伝えることができるようになりました。集団討論では、勉強会（特別講座）のメンバーにも協力してもらい、司会や記録、まとめ係といった役割を交代しながら対策を行いました。少しずつではありますが、力をつけていくことができたと思います。

勉強会（特別講座）を通して本当に多くのことを学び、しっかりと対策を行うことができました。そのため、教員採用試験の二次試験には、自信をもって臨むことができました。個人面接では、想定していなかった問題が2問ほど出題されましたが、勉強会（特別講座）で学んだことを踏まえながら、落ち着いて自分の考えを述べることができました。集団討論では、まとめ係を担当しました。他の受験者から様々な意見が出ましたが、自分なりに要点をおさえて、テーマに対するまとめを行うことができました。

私が教員採用試験に合格することができたのは、曾我先生の勉強会（特別講座）のおかげです。曾我先生は、私のために何度も面接演習を行ってくださいり、いつも的確なアドバイスをしてくださいました。また、親身になって相談にのってくださいました。更に、一緒に勉強会（特別講座）で学んでいる友達の存在も大きかったです。教員採用試験に向けて、日々切磋琢磨しながら努力しました。勉強するのが苦しくなったときも、お互いに励まし合いながら乗り越えることができました。そのおかげで、私は「英語教師になりたい」という子どものときからの夢を叶えることができました。曾我先生、本当にありがとうございました。

曾我先生に教えて頂いた鹿児島県が求めている教師像の一つに、「学び続ける教師」というものがありました。私はこの言葉を大切にしながら、日々学級経営や教科指導などに励んでいます。今後も学び続ける姿勢を忘れることなく、生徒達のために精一杯努力していきたいと思います。

本年度の教職特別講座進行中

教職特別講座が始まって、2か月あまりが経ちました。現在、14名の皆さんが演習に取り組んでいます。ぜひ最後まで、全員学び続けてほしいです。「継続は力なり」と言われますが、地道に、こつこつと積み上げていった力は、その人を支える土台（資質・能力）となるものです。卒業生の皆さんも、教職特別講座を通して、教員としての資質・能力を向上させ、今学校現場で活躍しています。

1月号に続き、学生の皆さん「教職特別講座」への抱負を紹介します。

私は、この教職特別講座で2つの目標を掲げる。1点目は、複雑化する教育現場での教育実践を身につけることである。近年の学校教育では、不登校問題、いじめ問題等の問題が多くなっている。この講座で学んだ理論を教育現場でしっかりと実践できるように、他者のことではなく、自分ごととしてしっかりと想えていきたい。また、特別講座では、自分と他の人のとの意見交換をする機会が多く、それを通して、多様な教育観に触れ、自分の考え方を向上させるとともに、他の人はなぜそのように考えたかなど、他者目線の教育観についてもしっかりと学んでいきたいと思う。2点目に、教員になる一番の理由である、「生徒の可能性を引き出し、学ぶことの楽しさを伝えられるような教師になる。」ことである。先に述べた通り、学校教育には、たくさんの問題があることも事実である。しかし、その問題以上に、自分が責任をもち、子どもを育てる達成感もあると考える。この目標を達成するためにも、教育に関する知識を身につけ、指導技術や教育者としてどのようにあるべきかを考える機会にしたいと思う。

私は高校生の時に素敵な先生との出会いがあり、高校の先生になりたいと思い始めましたが、その思いは年々強くなり、生徒を支えたいという気持ちがずっと心の中にあります。これを叶え、学校で働き始めたら、生徒に安心感を与えられるような、生徒の心の支えになれるような先生になりたいです。また、生徒からも他の先生方からも、様々な面で必要とされる先生になりたいです。そのために、教職特別講座で教員採用試験に向けた勉強に真剣に取り組み、それだけでなく教師として働き始めてからのことも意識し、教師として必要な資質や能力を身につけられるように、多くのことを吸収し、常に学ぶ姿勢で一生懸命取り組みたいです。よろしくお願ひ致します。

私は教職特別講座を通して、自分の知識や技術などを高めるだけでなく、自分が持っている教員としての資質や能力を、さらに磨いていけるように取り組んでいきたい。他の学生が考えていること、先生の立場としての価値観などを取り入れることで、自分が今まで考えなかつたことに触れることができ、自分の考えをさらに深めることができると考える。また、自分は現在中学校と高校のどちらの先生になるか迷っている。その決定材料として、自分の経験した学校生活や現在行っている中学校のボランティアなどをもとに、決めていきたい。そして、同じ教員になるもの同士として誠実な心や気持ちを尊重できるよう、自分の行動を見直し、生徒の前で堂々と行動することができる、指導することができる教員になるために、互いに支え合えるよう取り組んでいきたい。

道徳の教科化に思う！（シリーズ103）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。

今回は、7月号からスタートしたテーマ「生きる力をはぐくむ道徳授業の創造～発問や教材(資料)選択を児童にゆだねる道徳の時間の指導の在り方～」の6として、「実践編その1：道徳（道徳科）学習指導案（大主題名、大主題設定の理由、3単位時間全体を通してのねらい、指導計画）」について掲載します。

1 大主題名 「生命の尊さ」 (3時間扱い)

2 大主題設定の理由

○ 本主題は、内容項目D-（19）「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。」をねらいとしている。本内容は、低学年における「生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。」、中学年における「生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。」の内容を受け、発展的に指導されるものである。また、中学校における指導内容D-（19）「生命の尊さについて、その連續性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。」に発展していくものである。

なお、D-（19）については、自校の重点内容項目であり、本学級の計画としては、2学期に3単位時間を位置付けている。

第1時（30分授業）「教材選択を中心とした時間」

第2時（45分授業）「教材による価値追求を個人又はグループで深める時間」

第3時（60授業）「自分なりの考えを発表したり他の考えと比較したりして、ねらいへの迫りを確かにする時間」

の計画で進め、道徳的判断力、道徳的実践意欲や態度を育てることを主眼とする。

生命は、かけがえのないただひとつのものである。それは、生命体としてのひとりの人間の命そのものだけでなく、ひとりの人間の生き方（見方、考え方、感じ方、行動の仕方）をも含めたものである。つまり、人間のすべてであり、この世に生を受けたときからかけがえのないひとりの人間として（生きるものとして）生命が尊重されなければならない。人間は、ひとつの生物としての自己の生命を守ろうとする。しかし、他者とともに生きる人間の自覚に立つとき、自己の生命とともに他者の生命をも尊重する精神がなければならない。すべての生あるものを尊重することなしに、自己の生命を守ることはできない。この点から、「生命に対する畏敬の念」の重要性が取り上げられるゆえんがある。さらにこのことは、個人の尊厳、人権の尊重、人間性の尊重をも含めて道徳的生き方の目指す「人間尊重の精神」へつながるものである。この精神を踏まえ、自他の生命を救おうとする具体的な生活場面において、生命を尊重しようとする道徳的実践では、そのときの状況把握、自分の立場、冷静な判断、決断力等統合された精神力が要求される。

この期の児童は、命の大切さは分かっているが、具体的な生活場面でどう考えればよいのか、どうすればよいのか判断する力、決断する力が不十分である。生命の尊さを踏まえた上で、具体的な生活場面の中でどのような考え方をすればよいのかを指導することは、どんな道徳的実践が道徳的価値の実現になるのかを考えさせ、道徳的な実践力がより強められ、深められる上において意義深い。

○ 本学級の児童は、病気やけがの人に対しては、「早く元気になってほしい。何とかして助けたい。」という思いでいる。そのことは、病気やけがをした友人がいれば、親切にその詳細を報告にくることから伺える。互いに思いやりをもち、助け合おうとする態度も育ってきている。しかし、友人の状態を知らせるだけで、自分がどうすればよいのか考えられないでいる。それは、本主題がねらう内容に關係した具体的な生活場面において状況を把握し、自分がどうすればよいのか判断したり決断したりする力、さらには主体的に行動しようとする力が、不十分であることを示すものである。

道徳（道徳科）の時間においては、自分たちが深く考えてみたい場面を出し合い、それを中心に話合いを進められるようになり、話合いの深まりも出てきた。また、自分の考えをのびのびと発言しようとする意欲も増し、互いに発問する場面も多く見られるようになった。今後は、さらに児童の主体的な学習を目指すことが重要である。

○ そこで、人間尊重の精神を踏まえ、そのときの状況や自分の立場を考えた決断力、判断力、実行の大切さが分かり、進んで実践しようとする態度を育てるために、次の4つの教材「手のひらのかぎ」、「稻むらの火」、「猛火の中で」、「東京大空襲の中で」を取り上げることにした。

4つの教材は、それぞれに人物同士の関係、場面や状況の違いがあるが、生命の尊さについて、いろいろな角度から描いている教材群である。それぞれの教材のどれに興味をもつか、くわしく調べてみたいものを主体的に選ばせるというところから、主体的な学習意欲が喚起できると考える。

4つの教材の特質は、次の通りである。

「手のひらのかぎ」

バスの運転手である主人公は、職務中大けがをした少年を見つける。運転手としての責務も考えるが、少年を救うため、即座に決断し医者を迎えて行く。そして少年は一命をとりとめる。生命の尊さを踏まえた上で、そのときの状況の把握をしどうすればよいか判断したり、決断したりする人間の強さが描かれている。

「稻むらの火」

地震の直後、津波がくると思った主人公は村人に知らせるため、苦労して刈り取った自分の田のすべての稻むらに火をつける。そして、村人の命は救われる。大切な稻むらに火をつけることは、大きな決心を要したが、人の命を救うために判断し実行した強さが描かれている。

「猛火の中で」

関東大震災のために火災が発生する。猛火の中で、主人公は家族のことを心配しながら工場の消火にあたる。さらには、自分の命も危ないのにもかかわらず、溺れそうになっていた人々を助ける。自分の命だけではなく、他者の命の尊さを思い、危険を承知で助けに行った主人公の人間尊重の精神が強く描かれている。

「東京大空襲の中で」

大空襲の中、医師たちは、お産をしたばかりの母と生まれたばかりの赤ちゃんを避難させる。重いタンカを交代で持ち、避難民から踏みつぶされようとしたときも、自分たちで団いをつくって守り通した。人の命の尊さを思い、自分たちにできることを必死に実行した人々の、意志の強さや実行力が描かれている。

- 指導に際しては、3単位時間計画する。第1時（30分）は、教材選択を中心とする時間とし、命の尊さについて考えた体験（経験）にふれた後、4つの教材の中から、主人公の生き方や自分のこれまでの体験（経験）等を考え合わせた上で、自分で手がかりとしたい教材を選択させる。

第2時（45分）は自力解決のために、自分で選択した教材の主人公の気持ちや考え方、行動の仕方についてワークシートに整理する時間とする。道徳的行為への迷い、動機、考え方、気持ち等を個人でまとめさせる。また、次時で互いに考えを出し合い、深め合うことができるよう、主人公の行為に対しての評価を考えさせる内容も入れることにする。そして、一人一人の児童が自分なりの考えをふくらませるよう支援したい。

第3時（60分）では、まず同教材グループで、「感動した場面とそのときの主人公の気持ち」、「自分の考え方の変化」、「主人公の行為への評価」、「他教材への質問と自分たちの考え方」等について話し合い、他の考え方と比較しながら、第2時で得た自分の考えをさらに深めさせていきたい。全体の場では、各教材ごとに「選択した理由」、「主人公の道徳的行為と自分たちの考え方の変化」、「みんなにも考えてもらいたいこと」について発表させるが、教師もねらいとする価値に迫らせるために、「深めてもらいたいこと」を助言する。話合いの中では、それを中心に進めさせ互いの発問も交えながら、人の命の尊さを踏まえて、その命を救うためには、そのときの状況や自分の立場を考えた判断力、決断力、実行が大切であることを捉えさせていきたい。その際、児童の考えが深まり広められ、自分なりの価値観が確立できるよう話合いが焦点化され、討論となるよう助言するようにしたい。その上で、学習を通しての感想を書かせ、生命の尊さについて学んだことをまとめよう支援する。終末は、生命の尊さを体験した話をして終わるようにする。

3 3単位時間全体を通してのねらい

- 人の命はかけがえのないものであることを踏まえて、その命を救うためにはそのときの状況や自分の立場を考えた判断力、行動力、実行が大切であることが分かり、進んで実践しようとする態度を育てる。

4 指導計画

- | | |
|---|--------------|
| (1) 教材選択を中心とした時間 | ・・・ 1時間（30分） |
| (2) 教材による価値追求を個人で深める時間 | ・・・ 1時間（45分） |
| (3) 自分なりの考え方を発表したり他の考え方と比較したりして、ねらいへの迫りを確かにする時間 | ・・・ 1時間（60分） |